



TITLE:

(随想)比島の思い出

AUTHOR(S):

堀尾, 博

CITATION:

堀尾, 博. (随想)比島の思い出. 泌尿器科紀要 1962, 8(11): 637-638

ISSUE DATE:

1962-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112379>

RIGHT:

泌 尿 器 科 紀 要

第 8 卷 第 11 号

昭和 37 年 11 月

随 想

比 島 の 思 い 出

愛知県安城市 堀 尾 博

私の50余年の生涯の中で比島従軍の2年間の体験ほど忘れ難い印象的なものはない。18年前のことながら今尚身近かな生々しい記憶となつて甦つてくる。

当時東大泌尿器科外来医長だつた私を召集免除のため、恩師高橋教授が新設の東京医科歯科大学の教授に推薦して下さつて、その辞令の下りる寸前に召集の赤紙を受けとつた。

ニューギニアで惨敗した猛部隊の補充軍医として密封された派遣令書を手に単身シンガポールからジャバ、セレベス、と赤道を越え、尋ね尋ねて漸くマニラ郊外の所属部隊に辿り着いたのは、雪の2月に日本を発つてから約2ヶ月後のことであつた。

その間軍用行李一つを抱えてうろろろしている私を、思いがけない先輩後輩が思いがけない所所でいろいろとお世話して下さい、地獄で仏の思いをしたことも度々だつた。

昭南と称していたシンガポールの山下將軍麾下の南方総軍司令部におられた高木高級軍医は見習士官の私を高位高官専用のダグラス機に異例の同乗を許してくれた。又路上で偶然お会いした室賀少将は南方で適用するペソを路銀の足しにと恵んで下さつた。ジャカルタの間瀬大佐は私の家内の従兄であるが、宿舎を訪ねてくれ、ベチャに乗せて市内見物をさせた上、官舎に招いてマンデー風呂浴びた後珍果珍味をふんだんに振舞つて、オランダの豪華なベッドで泊めてくれた。メナドでは立派なホテルでカクテルをご馳走しダンスを楽しませてくれた海軍将校、ダバオでは映画館に案内してくれた下士官、行李を自家用車で運んでくれた軍属の先輩等々、いづれも僅かな縁故で親身も及ばぬ人の情をあれほど身に泌みて感じたことはなかつた。

西も東も分らぬ心細い孤独の旅もこれらの人々によつて華やかな海外旅行のように楽しく思われた。

世界一といわれるマニラ湾の満天の夕焼を眺めながら、当時築城作業部隊であつた高野隊の軍医として目的地に着いた。浅草海苔を手土産に赴任の申告を済した時、60才に近い予備陸軍大佐の高野部隊長は至極ご機嫌うるわしく、わざわざ風呂を焚いて旅の垢を落とさせてくれた。その後毎日、医務報告を済した後で、「軍医ビールをのんでいけ」とあまりのめな部隊長残りのビールを直立不動でごちそうになつたものである。

以後老軍医はいつも、どこえ出かけるにも、この部隊長の腰づけで身辺の雑事までやられた。しかし気の荒い高野大佐のビンタを食わない将校は凡らく私一人だつたかもしれない。この頃フィリッピンも平穏で、フェルナンド君というスペイン系の子供を連れて附近の病院やシビリアンや土人の患者を見舞つて歩いた。自分の子供にヒデキと命名したフィリッ

ピンの名士を診療したこともあつた。ニッパハウスの子宮癌の老婆にはモヒの注射をして神様のように喜ばれた。臍の尾を切つてやつた原地人の若い産婦は分娩後直ちに汚物を始末し胎児のうぶ湯をつかせていた。部隊での患者は殆んどなく、兵隊えの衛生講話や衛生管理で医務室は昼寝しているような閑散さであつたが、部隊長が竹槍での殺人方法や人間の肝のとり方など兵隊に教えておくと命令されたのには閉口した。医務室には首藤衛生軍曹と二人の助手、フィリピン人とスペインの混血児の娘がいて、前者は親指の2本ある多指症で、私が手術をすすめたが親が承知せず置手紙をして逃げていつた。混血児は私が持つていた家内の写真を見せたら、「ドクターのワイフはミス・テッサーか」と言われて、「馬鹿を申せ、俺の奥様は混りけのねえ大和撫子だ」と言つたら、びつくりしてげんな顔をしていた。つまり彼女は混血児は他の原地人とは違つて優秀な人間だと心得て、お世辞にほめたつもりだつたらしい。彼女は私のオールスフのジャツをカルキで洗濯してボロボロにしてしまつたことがある。アイムソリーと泣いていた彼女に「こんな涼しいジャツはねえ」と笑つて慰さめてやつたこともある。

高野部隊に約1年、その間多発性関節ロイマチスで平站病院に1ヶ月入院した。内地送還をすすめてくれた受持軍医の好意も当時の私の愛国心がそれを心よしとしなかつた。

後比島司令部軍医部長の戸田少将のご配慮で私はマニラ陸軍病院に転属となつた。ここで始めて軍医らしい仕事をしていたが、間もなく空襲が激しくなり、患者を連れてバギオの病院にのがれた。バギオはルソン島の軽井沢のような所、アメリカ人、スペイン人の避暑地で、気候も涼しく日本風の松林の中に点々としよう洒な別荘が建てられていた。きれいな花園や湖があつて、街は温泉郷のような風情があつた。私はこの辺りを観光客のように歩きまわつたものである。

その頃陸軍も空軍もこの周辺に集つて難をさけた。赤十字の旗の下に軍司令部がかくれているということがスパイされ、この街も病院も別荘も爆撃のために灰燼に帰してしまつた。

リンガエン湾に米軍が上陸してから、私はサントマス山中の第12野戦病院に廻わされて、最前線で傷兵の収容に当つた。皎々と電灯をともした軍艦やタンクの往来を目の前にして、外科の寛軍医と共に壕の中でローソクの火をたよりに、砲弾破片創や貫通銃創、盲管銃創の手術をしていた。艦砲射撃や迫撃砲の打ち込まれる度に大地はゆらぎ、壕の砂はバラバラと切開創にふりまかれた。手術後の創面には野蠅のたかるにまかせ、容赦なく蛆がわき、薬品衛生材料の乏しい中で幾多の将兵が死んでいつた。これが医者をする仕事か、手術前後の処置をあれほどやかましく教えられた大学の技術が何の役に立つたろうか。昔化膿創に対して蛆療法というのがあつたが、何のことかいと全くなさけなくなつた。

戎衣も破れ、軍靴も破れて、浮浪児か乞食のようにルソンの山中を唯命一つを守つてさまよい歩く大日本帝国軍人の姿は、この世の末の残忍な地獄絵図そのままだつた。死臭はただよい白骨転がる異国の荒野で私は又一つ思いがけない奇遇にぶつかつた。ポントックの山の中で待避中教室の先輩高橋吉定さんにひょっこり会つた。爆撃一過の後雑木林の中に特異な何々たる笑声を聞いて、ハット医局の彼氏を思い出し、思わず「吉ちゃんか」と声をかけた。彼も又びつくりして頭をあげ、地球上どこでどうしていたやら分らぬ二人が計らずもフィリッピンの山中で手を握りあつたとは、人の縁の不思議さに驚いた次第である。

しかしこんな思い出ばかりでなく、転戦中アララギの歌人猪原雄二君と、彼の詠んだ和歌を味わいながら戦争を忘れたこともある。

草しきて幾夜わが寝しフィリッピンの山を思えば去りゆく今は